

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

松 風 会 報

松風会設立二十周年に当たって



財団法人 松風会
理事長 松 永 祥 甫

激動の最中而も先行き全く不透明なうちに平成七年の幕開けとなりましたが、それだけに決意を新たに奮発しなければならぬとときに際会したと存じます。

戦後五十年、あの焦土から今日の経済的繁栄、世界の視聴を集めて逞しく成長致しました。しかし、その反面心―道徳的価値観などは誠に寒心、貧弱極まりないように思えます。しかも廿一世紀も後六年であります。果して廿一世紀の戦争と波乱の連続から脱脚して、夢と希望を乗せた平和で豊かな国際社会が期待できましようか。個人を超越した英知と努力が、鍵のようにも感ぜられます。

さて「歴史に育くまれ、歴史に生き、歴史を産み続けて幕末日本の黎明に不滅の存在を刻印された」吉田松陰先生を顕揚し、研究及び研究することを目的として創立された松風会も皆様のご愛顧を受けて早、廿周年を迎

えるに至りました。感謝感激に堪えません。少し理屈めいて恐縮に存じますが、現在は未来展開の基点であると同時に過去の集積の成果と理解致しますと、この際松風会発祥当時を回顧することは緊要不可欠のものと存ぜられます。財団法人松風会の発足は昭和四十九年三月であります。実はそれには貴重な濫觴があります。即ち昭和三十一年松陰先生百年祭記念事業推進会（二木謙吾会長）発足であります。この際、松陰先生顕彰事業に欠くことのできない功労者熊野隆治先生に焦点を当てさせて頂きます。



熊野先生（一八八二―一九七五）は長門市俵山に生れ、一九〇三年（明治三六）山口師範学校卒業、小学校訓導を振り出しに校長、師範学校教諭、更に県視学、県社会教育課長、県立育

成学校長、大阪修徳学院院长、国立武蔵野学院院长と枢要な教育歴を有され、終戦直後（昭二一）退官、帰山されています。「みかえりの塔」の著者として令名高く、比類なき傑出した教育者であります。天資英邁、堅忍不拔、豪気堂々、熟慮断行の性格の持ち主でありました。夙に松陰先生に私淑され、時至れば青春期の学生をして松陰精神にあやからしめんと心致され、松陰先生殉節百年を期して、松風寮の建設に情熱を注がれました、

昭和五十八年一月には新装なった山口県教育会館に事務所を移し得て現在に至っております。その間に於いて特筆すべき事業としては、昭和五十八年四月に佐々並夏木原に先生の東送の漢詩を、岸先生書で建碑を致しました。又平成四年三月には松陰先生生誕百六十年記念事業の一環として、三千万円の浄財を得て「吉田松陰と維新の群像」十体を萩街道の「松陰記念館」前に建立致しました。

更に平成七年度事業としての研究図書「脚注吉田松陰撰集―刑行事業があります。これは松陰先生遺文に脚注・解説文を付して直接松陰精神の体得に資せんとするものであり、刊行の暁には、各界各方面の御活用を期待し、目下編集作業を急いでいるところであります。

今や青少年問題はもとより社会全般に亘って道徳的心の欠如は人間社会の深刻な危機と申さねばなりません。幸い二千数百年来の儒教の精髓を体得され、至誠尚魂の活模範を示された松陰先生に学ぶことは社会の進展と人類幸福への道に通ずるものと信じます。



松風会設立二十周年を祝う

山口県教育委員会 教育長 高 浜 哲

松風会が設立され、今年で二十周年を迎えられ、心からお喜びを申し上げます。

生涯学習の時代を迎えた現在、県教育委員会では、教育重点施策の最重点事項に生涯学習の推進を取り上げ、県民一人ひとりが、いつでも、どこでも、だれでも、学ぶことができ、その学習の成果が適切に評価される生涯学習社会の実現に向けて鋭意取り組んでいるところであります。

ご承知のとおり、松陰先生は、松下村塾において、身分に関係なく広く青少年に門戸を開き、個性を伸長する教育を実践されておりましたが、まさしく、時代を先取りした生涯学習の先駆者であったといえます。

吉田松陰先生は、下田踏海から安政の大獄での刑死までの間、通算二年六カ月及び身柄を拘束され、自由を奪われた状況の中で、社会を動かす大事をやったのけられました。

また、松陰先生は、門弟と

ともに、草取りをしながら歴史について語り、米をつきながら本を読み、また、常に笑いをたたえて、にこやかに親しみやすく、

松陰先生を慕い、入門にやることはできないが、一緒に学ぶことはできる」と言っており、少年たちをまごつかせたというエピソードも残っております。

また、松陰先生は、家庭のあり方について「家庭には親愛と信頼の絆が大切」と言っております。

松陰先生は、杉百合之助常道の次男として誕生されましたが、杉一家には、困難をもつものもなし、暖かみのある親愛感がみなぎっていたといわれており、

一家が助け合い、暖かい愛情で結ばれている家庭で育ったことを松陰先生は、終生誇りにして

おられたといわれております。松陰先生が自分の信じることに従って若き命を燃やせたのも、家族の愛情と信頼感に支えられていたからではないでしょうか。

地域、家庭の教育力が問われている現在こそ、松陰先生の言われる「親愛と信頼の絆」の心に学び、二十一世紀を目前にした今、先人の生きざまを、正しく理解し、認識することにより、

また新たな未来も開けてくるものと信じ、今後、松陰先生を先駆とする防長教育の伝統を基盤に明日をひらく心豊かな人づくりに努めてまいりたいと思っております。

終わりに、松風会におかれましては、「維新黎明の先駆者松陰先生の遺徳とその精神の普及振興を図る」との理念のもと、

今後とも、ますますの御活躍御発展を祈念するとともに、皆様

の御健勝を祈念いたします。お祝いのことばといたします。

第10回松陰教学研究会

於山口市山泉荘 平成6年12月2日～3日

一基調講話

松陰の生きた時代

二プログラム

吉田松陰のイメージに迫る

三基調講話

吉田松陰の送序

四シンポジウム

松陰教学の精髓を、これからの教育に生かす方途を探る

五小中高校種別分散会

松陰の教学と学校の教育とのかかわり方を探る

六校種別分散会報告

七実践発表

八基調講話

人間吉田松陰の魅力

△参加者の声▽

松陰先生の門下生に寄せる絶大な信頼と、確固たる信念、燃える情熱等を振り返り、これからの生き方に道標を与えていただいたと思ひ、感激でいっぱいです……。

一人間松陰の智恵に学ぶ一



一人間松陰の智恵に学ぶ一

無意識の師道とその感化



徳山市立 桜田中学校

教頭 折本章

人(師)が人(弟)を導く教 おかなかった。

育的な営みにおいて、師たる者に高潔な人格や深い見識・情熱等が要求されることは、何人も全く異論を唱える余地のないところであろう。特に学校教育が師弟の人格的接触を基盤として推進されることを念頭に置けば、教師の日々の研鑽は必要不可欠なものとなる。

私はそれ以来、師の弟に与える影響の大なるを思い詰め、そうした師になりたいと念願してきた。現在、私が些細な松陰研究を続けているのも、恩師の影響に因るものである。今もつくづく思うことは、松陰の師道を彷彿させる恩師の無意識の師道である。

人は誰でも、生涯の内に畏敬する師と出会い、その後の人生観や生き方を大きく変えられた経験を持つであろう。私自身も何人かのそうした師との出会いがあったが、中でも大学時代の恩師政村敏雄先生との出会いは、当時の私の内面に強烈な消え失せることのない教師像を刻んだ。

現代、教員の資格は教員免許の取得に因って得られるが、これは決して教師たるに足る資質の永久保証ではない。形式的な一片の免許状は、飽くまでも必要最低限の一定水準に到達したことを意味するものであり、資質の完結性を意味するものではないことは申すまでもない。

松陰が村塾の双壁久坂玄瑞に送った書簡に「己を成して、人自ら降参するようにせねば、行けぬなり」と記しているが、これは正に恩師の教師像と重なり合うものであった。学問の態度、奥深さ、円熟した人格等は、私達を否応無しに降参させずには

教育力や感化力が生きたものとなるためには、間断なく自己を錬磨し、資質を高めていかなくてはならない。求道止まずして前進し続ける教師は、生徒に対して常に清新な教育力を発揮することができよう。

松陰は「高杉暢夫に與ふ」の

書に「足下の一言之れを沮むことなかりせば、僕殆ど將に大事を誤らんとせり。……足下僕の為に忠告せしこと、従前に非ず。而して此れ最も危機たり。ここを以て特に書して謝を言ふ。足下願はくは棄てず、更に誨ふることあれ」と記し、弟に深謝し指導までを請うている。

見よ、この師の真実なる姿を。師たる面目体面等丸で意識していないではないか。師のこうした純粹で謙虚な姿に、如何に頑質強き高杉とて、どうして心を動かさずにおられようか。久保清太郎にも詩経についての教えを請う等々、自らは師たるを全く自任していない。それでいて、諸友門下からは終生の師として畏敬されている。

高杉の存在的個性を価値的個性へと導いた功績は、その大部分を師松陰に譲らなければならぬであろう。高杉の個性は至る所で潰され勝ちであったが、独り松陰のみは、これを男児が荒々しい社会に立つための貴重な資質だとして大切に育てた。個性を把握受容し、理解と愛情を根底に個と接していく師の前に、頑児も素直にならざるを得なかった。

松陰は塾生一人一人の個性に即応した教育を施しながら、それらを基盤として結束性の強い集団教育を行っていた。つまり、森の一本一本の木をよくよく観察しながら、統一性のある森を造り上げた。一本一本の木に同じ手入れをするのでなく、それぞれの木の状態に応じて手入れをした。各々の性格、発達段階、境遇等を正確に把握し、その上で各人が自己実現していくように導いた。

「佐藤直方の師道を以て居らざる、実に感ずるに余りあり」と松陰は直方の師道を惜しみなく賞賛する。師弟共に聖賢の弟子という謙虚な姿勢で作輟なく学問を積み、指導意識を露にしないで弟と共に学ぶ同行の師道こそ、最も強く求められるものであろう。つまり、師道を自任しない者こそ真の師であり、人の師となるを好まずとも、自ずと人が師と認め奉るものである。

性的善なるを篤心した純粹な人間性は、人の欠点よりも先ず美点が目に飛び込んで来る。従って、褒めることが表面的なテクニックでなく、本心からそう思っ相手の美点を絶賛する。又人を疑うことを知らない教育

者的稟性は、「余寧ろ人を信ずるに失するとも、誓って人を疑ふに失することなからんことを欲す」という言葉に如実に表れている。

こうした松陰の美しい人間性や学問を通して得た深い見識は、諸友門下にどれ程強い感化を及ぼしたか計り知れない。教化は意識的であるが、感化は無意識的である。少なくとも、感化は師の人格や専門の見識に敬服し、師弟の間にはのぼのとした人間的精神が通い合っていないければ成立しない。

一般に、教師は一方的に話す嫌いがあり、それによって指導したという錯覚に陥り、自己満足している者が少なくない。無言の共感的理解や無償の愛情こそ、他をよく感化し得るものであろう。現代深刻な社会問題とあっては、「いじめ」等の問題を考えるにつき、教師の黙って聴く姿勢の大切さを痛感する。

聴くと言うは、唯音を聞くということでなく、相手の気持ちや心情を共感的に理解し、相手の心の痛みと一体になる内面的受け止めである。二十一世紀に活躍する若い教員にこのことを大いに期待したい。

聴くと言うは、唯音を聞くということでなく、相手の気持ちや心情を共感的に理解し、相手の心の痛みと一体になる内面的受け止めである。二十一世紀に活躍する若い教員にこのことを大いに期待したい。

聴くと言うは、唯音を聞くということでなく、相手の気持ちや心情を共感的に理解し、相手の心の痛みと一体になる内面的受け止めである。二十一世紀に活躍する若い教員にこのことを大いに期待したい。



教育改革の推進にあたって

山口県小学校長会 会長 重 田 純 堯

「松風会」は、昭和四十九年に設立され、本年二十周年という記念すべき年を迎えられ、この間、諸事業を通して山口県教育に多大の貢献をされておられることに對して、深甚なる敬意と感謝を表します。

時に、政局は混迷し、経済状況は停滞している今日ですが、教育には混迷も停滞もあってはならないことを銘記し、私たち校長のリーダーシップのもとと教育改革を推進しています。

そこで、現在当面している課題Ⅱ人間性豊かで、変化する社会に主体的に対応できる児童を育成するⅡを解明するために、次の事項に視点をあてて研究・実践し、新しい教育モデルの開発を目指しています。

一、創意ある教育課程の編成と実施
平成七年度から月二回実施される学校週五日制への対応や特色ある学校づくりという立場から、創意の時間、学校行事などを見直すこと。特に、各教科や学年に応じて、問題解決的な学習と系統的な学習を展開する単元や題材を明確にして指導の効率を図ること。
などに焦点をあてて研究しています。
二、授業の改善

改革の中核は、日々の授業改善であるという考えから、学ぶ意欲や学び方など、新しい学力観に立った指導を重視するとともに、子どもの側に立った指導を展開して、授業の変革を求めています。

また、平成五年度から導入された T方式（複数教師による指導）など、個に応じた指導法についての研究を深め、個性を生かす指導に努めています。そのほか、感動体験を重視し心の教育・情の教育の充実・深化を図る。人権尊重という立場から同和教育の充実・深化を図る。人間尊重・環境保全の立場から環境教育を推進する。など実態に応じて継続的・発展的に研究を進めています。

この教育改革の推進が教室の入り口で止まることなく、今こそ校長のリーダーシップを発揮して、教育のあるべき姿を追求したいと考えています。

つきましては、皆様方の大所高所からの御指導・御叱正のほどよろしくお願いいたします。

終わりにになりましたが、設立二十周年を契機に、「松風会」のさらなる発展を祈念いたします。



松風会雑感

山口県中学校長会 会長 梶 田 富 三

平成七年を迎え、松風会理事長松永先生をはじめ各役職員の皆様の益々のご多幸とご発展を祈念いたします。

併せて、会報「松門」二十号・松風会設立二十周年を祝し、心からおよこび申し上げます。

私、もとより浅学非才の身、本記念号を飾るにふさわしいものではございませんが、所感の一端を述べさせていただきます。

昨年末、第十回松陰教学研究会の開會式に参加して、松風会のこの有意義な企画と事務局の方々の熱意を肌で感じ、感服した。又、参加会員のまなざしから、松陰教学研究への真摯な取り組みと意気込みを感じ、感動を覚え、私自身大きな刺激を受けたことに感謝している。

考えてみるに、山口県人は松陰について深く研究しているに拘らず、先生の涵育薫陶を受けて育ってきているように思える。これは偏に、早くから幾多の刊行物を出し、松陰研究に格別力を注いでこられた松風会や山口県教育会の大なる功績であり、心から敬意を表したい。

私自身教職について間もない頃、校長の発せられた言葉に、ハツとして、グツときたことがある。それは、「妄

に人の師となる勿れ、妄に人を師とする勿れ必ず真に：」の言葉だった。

当時は誰の言葉か知らないまま、自分は教師になっているが大丈夫かと不安とおそれでいっばいになった。義務教育に携わる身、子どもは先生を選ぶことができないだけに、私をこれほど強烈に震撼させた一言はなかった。その後しばらくたって、「講孟劄記」を読む中でこの言葉に出会い、改めて深くかみしめたことであった。以来、私の座右の銘となり、これによって内省自戒し身をひきしめている。

もう一つ、忘れられないのはこの言葉。まさに松陰教学の真骨頂、「至誠」である。小学生の頃、書初めに何と書こうかと父に尋ねたところ、「至誠通天」と教えてくれた。：「至誠而不動者未之有也。」である。

これらがその後の私の生き方、特に難問解決時の信念となり、私の士気を鼓舞している。

「教育は人なり」―教員の資質の向上が叫ばれている今日、この「至誠」と先の言葉は、教職をめざそうとしている人を含め、教職に就いている人が特に心すべき至言である。

この古今不易の哲理を肝に銘じ、心新たに教育に精進したい。



第二十号の発刊を祝して

山口県高等学校長協会 会長 相本 晃宏

会報「松門」の第二十号発刊おめでとうございます。松門は松陰研究を志す方々の貴重な研究成果を発表される会報と承っております。関係の皆様のため御努力と各教育関係機関等の御支援により、年々内容を充実され、

となられた松陰先生の教學精神に学ぶことはたいへん意義深いことと考えます。

二十号を発刊されましたことに敬意と祝意を表すものであります。松風会におかれては財団法人設立以来、松陰の提供を初め、松陰遍歴地の全国調査による松陰の事蹟及び精神の調査研究管理職を対象とする松陰教学研究会の開催、青年教師松陰教学研究会の開催、更に松陰研修塾の開塾等の各種の研修研究事業を展開され、山口県教育振興へ多大の成果をあげてこられました。

三輪稔夫先生の講話の中に「松陰は弘(情)と毅(意)の育成に全力を傾注され、その弘と毅を正しく活用するために何が義(知)であるか、何が道理であるかを学ばせたといつてよい。知情意一体の教育が松下村塾の教育である。知情意は本来一体のものであり、その一体のものとは精神即ち心である。云いかえると松下村塾の教育は心の教育である。」といわれておりますが、まさに今日推進されている心の教育・情の教育に通じるものだと思います。

最近の急速な情報化、国際化高齢化が進展する中で、社会や文化の発展に貢献できる人材の育成を目指した教育の実現が強く求められておりますが、現実には「いじめの問題」等、教育に関する問題が大きく取り上げられ、学校教育・家庭教育のあり方が論じられております。しかしながら明確な解答はなかなか困難で、それぞれの立場で懸命に模索しているところであり、このような時にこそ明治維新の原動力

心の教育・情の教育の一層の充実を基礎として、一人ひとりの個性や能力及び創造性の伸張と自己教育力の育成を旨とする教育を推進するために、松陰精神に学び、生かすことが肝要であると思えます。

山口県教育の振興のために、松風会の皆様の一層のご研鑽とその研究成果の普及へのご努力とを御期待いたしますとともに、会報「松門」のますますの充実発展を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

松風会二十周年、並びに「松風」二十号発刊を心からお慶び申し上げます。松陰については、教育者であった父(終戦をはさんで数年間旧滝部農学校で教鞭をとる)から何度か聞かされて、その意味ではなつかしい名前だが、彼の書いたものを読むということはなかった。それが最近になって、卒業論文に松陰の「講孟割記」を取り上げる学生が出て来たおかげで二度ほど読む機会が与えられた。勿論、現代っ子だから原文だけではどうにもならず、近藤啓吾氏の訳注つきを頼りに読み進めるしかなかった。その中で彼らを取り上げたもの一つに、巻の四下第三十章の中の一節で、松下村の掟の第一にしようとして松陰が云っている「往くものは追わない、しかしその人物の過去の過ちは覚えておくことなけれ。」がある。これは全てが松陰の独創であるかどうかは別にここに松陰の考え方の独自性を見ようとした学生の見方は正しい。そしてこのような考え方は全ての教師が持たなければならぬことではなからうか。



パウロよ出でよ

山口大学教育学部 学部長 伊東 斌

ただしかし、現在世界中で松陰が読まれているかという、残念ながらそうないのではないかと。それに

ここです。初めはローカルな信仰にすぎなかったのに世界中にひろまったのはわけというか一つのきっかけがあった。それはパウロの存在である。周知のように、彼は最初はイエスの教えに反対していた。それがあることをきっかけにイエスの教えを信ずるようになった。そして彼の命がけの布教のおかげで世界的な宗教になった。

松陰の教えを宗教にしようというのではない。しかし出来るだけ多くの人に読まれるためには、すぐれた現代語訳があるとか、立派な研究者がおられるとか他に、いわば生命をかけて世界に広めていこうとする人がいなければならぬのではないかと。ただたんに松陰を読むというのではなく、松陰を実行する人、キリスト教におけるパウロのような人が出て来なければならぬのではないかと素人の想うところである。

パウロのような人が出て来なければならぬのではないかと素人の想うところである。

(財) 松風会設立二十周年記念事業

脚注 吉田松陰撰集の刊行

— 人間松陰の生と死 —

遺文編組見本

事業への着手 平成三年度
事業の完成 平成七年度

1 松村文祥を送る序 (未忍焚稿) 弘化三年(一八四六)十七歳

夫れ農工商賈にして其の業を成さざる者、十に一二もなし。豈に彼れ皆才且つ知ならんや。士たる者にして其の道に精しからざる者、十に蓋し八九あらん。豈に此れ皆不才不知ならんや。蓋し亦故あるのみ。蓋し士たる者は禄を公上に食み、耕さずして粒米以て腹を充たすに足り、織らずして布帛以て身を蔽ふに足る。故に生れては則ち逸し、復た憂勤の心あることなし。是れ其の道に精なる能はざる所以なり。彼の農工商賈は則ち然らず。一たび其の業を墜さば、則ち仰ぎては以て父母に事ふるなく、俯しては以て妻子を畜ふなし。故に其の此れを為すや志を致す。是れ能く其の業を成す所以なり。然らば則ち道の精なると精ならざると、業の成ると成らざるとは、志の立つと立たざるとに在るのみ。故に士たる者は其の志を立てざるべからず。夫れ志の在る所、氣も亦従ふ。志氣の在る所、遠くして至るべからざるなく、難くして為すべからざるものなし。松村文祥は、家、医を世々にし儒を兼ね、厥の紹、其れ念はざるべけんや。儒や、鬼神の幽遠、性命の蘊奥よりして、下文章緒余の事に至るまで兼ねざるなし。苟も其の学を之れ純正にせざれば、則ち上は以て主心の非を格すなく、下は以て同僚の善を責むるなし。医や、疾病の因、薬石の功より以て針灸の細に至るまで漏らす所なし。苟も其の病を之れ審密にせ

本書の構成

| | | |
|---------------|------------|-----|
| 一序章 吉田松陰の生涯 | 第三章 野山獄・幽室 | 四八 |
| 二遺文編 基本遺文一六五編 | 第四章 松下村塾 | 三〇四 |
| 第一章 兵学修業 五 | 第五章 野山再獄 | 三三二 |
| 第二章 遊歴 二九 | 第六章 殉難 | 一七 |
| | 三 資料編 | |
| | 年譜・系図・索引 | |
| | 文献解題ほか | |

松村文祥 一八一六—九三 松下村塾(玉木文之進主宰)の同学。医者・儒者の家柄。現在の柳井市阿月の人。送る序 人が旅立つ時、その人への期待や旅の意義、安全等を述べて、はなむけとする文章。送序、贈序に同じ。農工商賈にして：農工商に従事するもので、その家業を成し遂げない者はほとんどいない。豈に彼れ皆：どうして彼らがすべて才知に思われているといえるようか。其の道に精しからざる者：武士の道に精通しない者が大半であろう。蓋し亦故あるのみ つまり、これには訳がある。禄を公上に食み 家祿を藩主からいただき。生れては則ち逸し 生まれ落ちた時から気ままに暮らす。憂勤の心あることなし 心を尽くして努めようとする心構えがない。是れ其の道に精なる能はざる：これが武士の道に精通することのできない理由である。一たび其の業を墜さば もしも家業を失敗するようなことがあれば。仰ぎては以て父母に事ふるなく：上は父母への孝養もできず、下は妻子さえ養うことができない。故に其の此れを為すや志を致す それ故、農工商に従事する者はそれぞれの家業を成し遂げようと固く志を立てるのである。故に士たる者は其の志を立てざるべからず。それ故、武士は武士としての志を確立すべきだ。志の在る所、氣も亦従ふ 志さえあれば氣力も起る。志氣の在る所、遠くして至るべからざるなく：志と氣力があれば、目標がどんなに遠くに

ざれば、則ち人の非命を致す。其の任亦甚だ重からずや。夫れ重きを以て任と為す者、才も以て恃と為すに足らず、知も以て恃と為すに足らず。必ずや志を以て氣を率い、黽勉事に従ひて而る後可なり。

文祥、松下村塾に寓すること茲に一年、常に灯を分ちて読み、席を同じうして寝ね、朝夕相警励す。今將に去つて医を共に学ばんとす。一別の余、離隔すること其の幾年なるを知らず。豈に一言の贈なかるべけんや。因つて朋友切悃の義を慕ひ、聊か思ふ所を陳べ、以て之れが序と為す。

〔解説〕

松陰十七歳の作。友人松村文祥を医学修行に送り出すに当たつて書いたものである。ここでは、事の成否は何よりも志の有無によるのであり、従がつて重任を担おうとする者にとつて、まずは確固たる志を持つて勉めることが重要だと述べ、励ましの言葉として、それはまた、將に優れた明倫館の師範にならうと懸命に努力している自分自身に言いかけられているようにもうかがえ、そこには青年の純粋で一途な覚悟と気迫が感じられる。松陰は三十余の送序を認めているが、送序は特定の個人に与えたもので、「名字の説」ともに彼の人間関係あるいは個性尊重の教育を知る上でも注目しに値する。

基本的遺文の取扱いについて

一 基本方針

- 松陰研究の基本は、遺文に
- 直接ふれていくこと
- 初心者を対象に、自学の成

二 具体的な対応

- 1 旧漢字を可能な限り、常用漢字になおした
- 2 読みにくい漢字にはルビを付した
- 3 漢詩には、読み下し文・脚注・通釈をつけた
- 4 難文・難語句等に脚注を留意して読解を容易にした

立を図ること

○ むつかしい遺文を分かり易くすること

2 読みにくい漢字にはルビを付した

3 漢詩には、読み下し文・脚注・通釈をつけた

5 各遺文ごとに解説を述べ、正しく・深く・発展的な読解ができるように努めた

6 各遺文は、松陰の生涯の具体的な状況との関連において読解が成立するとともに

に一層深い理解が得られるように、序章及び資料編等を設けて研究者の便を図つた

A5版上製本函入り

あつても到達しないことはなく、どんなに困難な業務でもできないことはない。版の紹、其れ念はざるべけんや。医に儒を兼ねる家業を継ぐことをしっかりと心に留めるべきである。儒や、鬼神の幽遠、性命の蘊奥よりして：儒者は、祖靈の奥深いさま、万物のさまざま性質の深妙さをはじめ、下は礼法・文章その他のことまで、あわせ学ばねばならない。上は以て主心の非を格すなく：上は主君の過ちを諫め正すこともせず、下は同僚に善行を勧めることもしない。薬石の功より以て針灸の細に至るまで 投薬・治療の方法から針・灸による療法のことまで 苟も其の病を之れ審密にせざれば、もし、医者がその病状を詳しく診察し、適切に処置しなければ 人の非命を致す 患者を死に至らせる。其の任亦甚だ重からずや 医者への任務はなんと重大ではないか。才も以て恃と為すに足らず、知も以て恃と為すに足らず。才能、知識とも頼りにならない。必ずや志を以て氣を率い、必ず志を立てて、氣力を引き起こす。黽勉事に従ひて而る後可なり 努め励んで医療に当たつてはじめて医者への任務を果たすことができる。相警励す 互いにいましめあひ励ましあつた。芸 安芸(広島)。一別の余、離隔すること：いったん離別すれば再会まで幾年かかるか分からない。豈に一言の贈なかるべけんや、どうして送別の朋友切悃の義を慕ひ、朋友は互いに親切を尽くして励ますべしという友情を重んじて「朋友切切悃悃」(「論語」子路)



吉田松陰の送序について

山口女子大学名誉教授
松風 会 理事 河村 太市

一、送序とは

送序というのは、旅立とうとする家族の者や友人知人などに對して、旅の平安を祈り、またその行を壯にするために餞けとして贈られる文章をいうのであり、文体の一種である。厳密には送序とは區別されるものと思われる贈序も、ここでは送序に含めて検討することにした。

なお松陰は、送序とは別に、別離の餞けとして作った詩を十首ばかり残している。

松陰が書いた送序は、左表にみられるように、旅の目的からみて、①留学する者への送序、②赴任する者への送序、③帰省する者への送序、④その他(嫁ぐ妹へのもの、「松浦生に贈る序」)に分ってみることができ「留学」には、いわゆる学

| 分類 | 送序数 |
|-------|-----|
| 留 学 | 15 |
| 赴 任 | 11 |
| 帰 省 | 10 |
| そ の 他 | 2 |
| 計 | 38 |

問修行を目的とする者とともに、世の中の動きを實際に見とどけるために遊歴する者などが含まれる。「赴任」には、官の命令によるもの、松陰の指示によるもの、あるいは自分の仕事にかける者などが含まれる。「帰省」には、江戸からの帰藩、また萩から出身地へ帰る者などが含まれる。

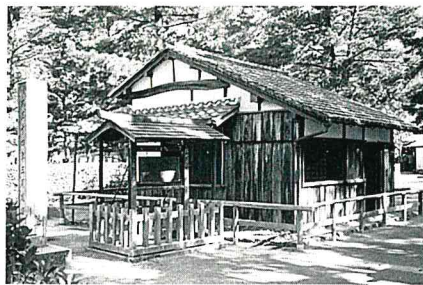
右の四者には、それぞれ特色がみられるのであるが、ここでは松陰の送序を全体的にみて特色と思われれることを指摘するに止めたい。

二、松陰の送序の特色

ア、本誌に掲載されている、「松村文祥を送る序」を例にとれば、そこに、「道の精なると精ならざると、業の成ると成らざるとは、志の立つと立たざるとに在るのみ」、とみえるように、松陰は「志」を常に行動の基盤だと考えた人である。したがって、彼における旅、ないし旅立つということは、志を確立

するためのものであるか、あるいは志の実現を図るための出立に他ならないのである。志を行動の基盤におく構えは、彼の送序の全てを貫いてみられるものなのである。

イ、彼は送序において、その旅のもつ意義を明確にしてみせる。そうすることによって、本人をしてその志を確かなものにし、旅立つ者としての自覚と責任感を強固なものにしているのである。



松下村塾(萩市)

ウ、送序は特定の個人に与えられるものである(中には「須佐の七生邑に帰るに贈る言」、「六人の者を送る叙」など複数の者を対象としたものもあるが)したがってその個人との絆を大切にし深い愛情が注がれている

ことは言うまでもないが、送序の送序たるところは、その人物に對する期待、そしてこれを実現するに違いないとする信頼感が明確に伺えることである。

エ、「松浦生に贈る序」に、「序を為りて生に贈り、併せて以て自ら励ます」、などとみえるように、松陰は送序を書いているとき、相手を激励するとともに、自らにいきかせ自らを奮い起させようとしていたものと思われる。本誌掲載の、「松村文祥を送る序」からもそうした松陰の気持ちが見え、伝わってくるのである。

オ、松陰は、「時務を知る者は俊傑に在り」と迷べているように、時務、つまり時代がかかえている問題への関心を失ったものは学問と考えていないのである。したがって彼の送序、とくにその「赴任」の送序には、彼の時務に對する見解が明瞭に反映されていることに注目したいと思う。

三、松陰の名字説

送序と同一の文体に分類されるものに、「字説」がある(小川環樹、西田太一郎『漢文入門』岩波全書)。松陰の名字説とよ

ばれるものはこれに当る。それは、門人や知人などに、その名と字を選んでやり、それを選定した理由や典拠などを示して本人の自覚を促し、また将来への指針とすべく期待を込めて綴ったものである。松陰は十数人の者に名字を選定してやり名字説を書き与えているのである。彼が書き与えた名字説にはほぼ一定した構成がみられる。

- ①本人との出会い、あるいは名字を選定することになった事情を述べる。
- ②本人の人となり(性格や境遇など)を指摘する。
- ③②との関係において名字を選定し、選定した理由や出典などを示す。

④今後の行動と示唆を与える。送序と名字説とは、文体として同一のものに分類されるというだけではなく、ともに個人についての深い洞察に裏うちされるその個人の伸長を念願しているもので、教育資料としても重要な意味をもつものである。

松風会は

あなたの松陰研究室
お気軽にどうぞ

☎〇八三九・一二二・一二一八